



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伝統的母性観の影響下における母親の育児観：母親役割期待に関する調査から
Author(s)	大西, 由希子; 良村, 貞子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 9, 1-12
Issue Date	1997-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37614
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_1-12.pdf



原 著

伝統的母性観の影響下における母親の育児観

—母親役割期待に関する調査から—

大西由希子・良村 貞子

Mother's Opinions on Child Care under the Influence of Traditional Gender-Roles in Japan

—Study on the Mother's Expected Roles in Society—

Yukiko Onishi and Sadako Yoshimura

Abstract

There are continuing internal gender-roles under paternalism after the "IE" system was broken in Japan.

We conducted a questionnaire survey in order to analyze mothers with infants opinions on how the mother's role and child care.

1. 86.9% of mothers became house wives after they got married and became pregnant. Many mothers take the role of leader with regards to child care. Also they almost all thought that child care is a job without compensation and that there is a strong need for maternal instinct or love.

2. 85.4% of families were classified as nuclear family. Many families didn't have the type of support expected from a husband. Though husbands discharged mental support for their wives, they didn't take a major role in child care.

3. Mothers who did not persuade self-realization felt that there were conflicts with regards to the expected gender-roles in their society, while mothers who persuaded self-realization felt that there weren't. Many mothers thought if the society provided for child care costs, they would want to have many children.

Thus we recognized that many mothers feel there is a gap between gender-roles and actual life style.

要 約

「家」制度が崩壊した後も伝統的母性観に基づく男女両性の役割規範は内面化され、引き継が

れている。この性別役割観が現代の母親たちの役割意識と対育児感情に与える影響について、乳児を持つ母親を対象にアンケート調査を行い、検討した。

北海道大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

Department of midwifery, College of Medical Technology, Hokkaido University

1. 対象者の86.9%が結婚や妊娠を契機に専業主婦となっていた。育児の主な担い手は母親であり、育児は「無償の奉仕」「母性本能や母性愛が必要」という考えが多かった。

2. 85.4%が核家族世帯であり、夫以外の育児協力者がいない者も多かった。実際には、夫は精神的サポート役割を果たしているが、育児協力量は少なかった。

3. 育児に専業することで自己実現欲求を阻害されているとする女性では、役割葛藤が大きかった。また、「育児に社会的報酬が支払われるなら、もっと子供を産みたい」と思う女性も多かったことから、役割観と現実生活の間にギャップのあることが推察される。

キーワード：「家」制度、伝統的母性観、母親役割、ケア役割の社会的価値、役割葛藤

I. 緒 言

女性固有の出産や授乳に関わる生理的特性から、女性には母性本能があるとみなす社会的傾向は根強いものがある。この伝統的母性観は「女性には本能的愛情が備わっている」という母性神話のもとに、自己犠牲や献身を母親の愛情の証しとみなし、育児を母子関係に限定した問題として取り扱うような考えの基盤となっている¹⁾。また家事や育児という家族へのケアは女性役割とされ、家事をし、母性本能をもって育児することが女性に求められてきた。そのような考えから、例えば母親による乳幼児虐待や育児ノイローゼなどは、あたかも母性喪失であるかのように当事者の母親を非難し、追い詰めてきた。しかし、最近の研究は母性行動は女性の本能ではなく、経験や学習によって習得されるものであることを明らかにしてきている^{2)~6)}。

実際に育児に関わる母親は、現実生活の中で役割をどのように受容し行動しているであろう

か。本研究は、母親の対育児感情と役割受容に対する伝統的母性観の影響を検証する目的で、乳児を持つ母親の生活と心理的要因を中心に分析を試みた。

II. 研究方法

§1 調査方法

調査用紙は自己記入式質問紙であり、配布時に個別に説明し、無記名の郵送返送方式とした。調査は1994年9月と1995年4月の2回実施した。

§2 調査対象

札幌市の保健所における4ヶ月健診を受診した乳児の母親、および市内数ヶ所の乳児保育園を利用する母親400名を対象とし、調査用紙を配布した。調査用紙の回収数は178名(回収率44.5%)、有効回答178名であった。

有効回答者178名のうち、初産婦は110名(61.8%)、経産婦は68名(38.2%)であった。対象者の平均年齢は28.9歳、対象者の夫の平均年齢は31.9歳であった。

§3 調査内容

(1) 調査対象の背景に関する基礎的項目

母親自身の年齢、学歴、就業の有無と就業形態、家族構成、子供の人数と年齢、夫の年齢と職業、世帯の収入および住居環境。

(2) 対象の子供に関する項目

妊娠や分娩の経過、栄養状態と発達、機嫌と一般状態、扱いやすさ、負担を感じた育児内容および育児不安を感じた内容。

(3) 育児に関する基礎的項目

育児において苦労したこと、育児の主な担い手は誰か、育児が日常生活に占める割合および育児協力者の有無。

(4) 夫の育児に関する項目

夫の育児内容および夫からのサポート。

(5) 対育児感情を測定する項目(22項目)

(6) 対夫感情を測定する項目（8項目）

(7) 家事・育児の報酬性に関する項目

家事や育児は女性の仕事であるか、それは労働が無償の奉仕か、報酬として見合う金額および育児報酬と育児意欲について。

上記(5)(6)の30項目については、大日向⁷⁾、牧野⁸⁾、花沢⁹⁾、今井¹⁰⁾の尺度を参考に独自に作成した。各項目の内容に対して、5段階（1～5点）で評定を求め、評定が肯定的であるほど得点が高くなるように配分した。

* 対育児感情・対夫感情の測定項目については因子分析の表3を参照。

Ⅲ. 結 果

§1 調査対象

調査対象の年齢・学歴・職業、夫の年齢、家族構成・子供の人数および世帯の年収については表1に示すとおりである。

家族構成は核家族世帯が85.4%を占めていた。未婚女性を含む母子世帯は3世帯（1.7%）あった。世帯の家族人数は平均で3.7人、夫婦の平均子供数は1.4人であった。

結婚前には95.5%の女性が有職であったが、その有職者のうちの86.9%が結婚や妊娠を契機に退職し、専業主婦となっていた。退職の時期と理由について表2に示す。退職したことについては93.7%が「納得している」と回答していた。退職した女性達の81.4%は「育児に手がかからなくなったら再び働きたい」と回答していた。

子育てをしながら現在も就労している女性は、パート勤務や育児休業中の者を含めても18.0%であるが、医師や看護婦、教師、美容師、経理などの免許や資格を有してその職業に就いている者が多かった。

世帯の主な収入源は、86.0%が「夫の給料」と回答しており、「夫婦の給料」とする完全共働き世帯は11.2%であった。他に「夫の給料のみ

では生活が困難で両親からの援助を受けている」は1.1%（2世帯）、「両親の援助」が0.6%（1世帯）、生活保護世帯が1.1%（2世帯—いずれも母子世帯）であった。

§2 感情測定項目の因子分析の結果

対育児感情および対夫感情30項目について因子分析（主因子分析よりVarimax回転を行った）を行い、得られた3因子と、そこに影響する要因について検討した。因子分析の結果は表3に示す。各因子間には、有意な相関が見られており（ $r \geq 0.31$, $p < .001$ ）、特に第2因子と第3因子間の相関が高かった（ $r = 0.52$ ）。3因子に高い負荷量を示した項目は、第1因子で「夫と私の関係はとてもよい」「夫に支えられていると感じる」より、「夫のサポート」と命名する。第2因子では「この子がいるのでやりたいことが出来ないと思う」「子育てよりも自分の好きなことがしたい」より、「育児負担による自己実現欲求阻害」と命名する。第3因子では「育児はどんな仕事よりも価値のある仕事だ」「今回の出産は素晴らしい経験だった」より、「母親役割受容」と命名する。

以下、各因子ごとに感情尺度得点を算出した。各因子の得点平均値は、第1因子「夫のサポート」は3.92点（SD 0.78）、第2因子「育児による自己欲求阻害」は3.81点（SD 0.61）、第3因子「母親役割受容」は3.90点（SD 0.62）であった。第2因子と第3因子の平均値には有意差があったことから（ $p < .05$ ）、「母親役割受容」は、「育児負担による自己実現欲求阻害」に比較して肯定的であると考えられる。

各因子別項目ごとの平均値と否定的評定の割合を表4に示した。否定的な評定の割合が高かった項目は、「主婦は我慢させられることが多い」が55.9%、「夫がもう少し育児に協力してくれたら育児は楽になる」が50.8%と高く、「夫に對し言いたいことを我慢している」と感じている者、その他、「日々の生活にゆとりがない」「育

表1 調査対象に関する基礎的事項

調査対象（母親）の年齢	平均28.8歳（SD4.1，年齢範囲20～39歳）	
調査対象の学歴	中 学 卒	17 (9.6%)
	高 校 卒	72 (40.7%)
	専門学校卒	32 (18.1%)
	短 大 卒	34 (19.2%)
	大 学 卒	18 (10.2%)
	大 学 院 卒	4 (2.3%)
調査対象の就業形態	無 職(専業主婦)	146 (82.6%)
	有 職	32 (18.0%)
	フルタイム稼働	20
	パート勤務	3
	家 業	4
	内 職	1
	育児休業中	4
夫 の 年 齢	平均31.4歳（SD4.7，年齢範囲21～45歳）	
家 族 構 成	核家族（夫婦と子供のみ）	152 (85.4%)
	母 子 家 庭	3 (1.7%)
	夫の家族と同居	15 (8.4%)
	対象者の家族と同居	7 (3.9%)
	夫と別居中	1 (0.6%)
子 供 の 数	1 人	110 (61.8%)
	2 人	56 (31.5%)
	3 人	12 (6.7%)
	平均	1.4人
主 な 収 入 源	夫 の 給 料	153 (86.0%)
	夫と自分の給料	20 (11.2%)
	生 活 保 護	2 (1.1%)
	両親からの援助	2 (1.1%)
	夫の給料と自分の貯金	1 (0.6%)
世 帯 の 年 収	100～ 200万円	2 (1.1%)
	200～ 300万円	23 (13.2%)
	300～ 400万円	52 (29.2%)
	400～ 500万円	37 (21.3%)
	500～ 600万円	23 (13.2%)
	600～ 700万円	18 (10.3%)
	700～ 800万円	8 (4.6%)
	800～ 900万円	3 (1.7%)
	900～1000万円	3 (1.7%)
	1000万円以上	5 (2.9%)
	平均年収	400～ 500万円

伝統的母性観の影響下における母親の育児観

表2 退職の時期と理由（結婚前には就業していた女性170名を対象）

退職の時期	結婚して	41 (28.3%)
	妊娠して	85 (58.6%)
	出産して	6 (4.1%)
	2人目を妊娠して	2 (1.4%)
	2人目を出産して	4 (2.8%)
	その他	7 (4.8%)
退職の理由 (退職したことに納得 93.7%) (納得していない 6.3%)	はじめてからその予定だったので	64 (44.4%)
	仕事を続けるのは無理だと思った	62 (42.4%)
	夫から辞めるように言われた	11 (7.6%)
	上司から辞めるように言われた	7 (4.9%)
	その他	1 (0.7%)

表3 対夫感情および対育児感情30項目に対する因子分析の結果
FACTOR ANALYSIS Rotation Method: Varimax

Rotated Factor Pattern

項目／因子	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3
夫との関係はとても良い	0.83429	0.19039	0.10275
夫に支えられていると感じる	0.80890	0.01883	0.11119
夫はこどもにとっていい父親だ	0.73985	0.04081	0.13248
夫とは何でも話し合える	0.69883	0.19633	0.08298
夫は育児に協力的だ	0.69250	0.00424	0.11893
夫に対しいいたいことを我慢している	0.64693	0.17537	-0.01135
夫は子供が出来てから冷たくなった	0.58326	0.16636	0.13036
夫がもう少し協力してくれたら育児は楽になる	0.40958	0.14095	0.05825
この子がいるのでやりたいこと出来ない	0.09095	0.62079	0.11160
育児よりも自分の好きなことがしたい	0.05993	0.61479	0.17522
育児は負担で面倒だ	-0.02492	0.60523	0.26321
日々の生活にゆとりがない	0.15792	0.59765	-0.11301
育児をしていると世の中に取り残されそう	0.13170	0.54039	-0.00319
何故自分だけがこんなに苦労するのだろう	0.31219	0.53673	0.22765
主婦は我慢させられることが多い	0.45146	0.52384	-0.11020
子供といると心が和む	0.10169	0.50052	0.39014
子供に甘えられると苛々する	0.17414	0.46167	0.27389
育児に自信が無い	0.17669	0.44519	0.17825
育児は楽しい	0.07186	0.43161	0.32246
女に生まれて損をした	0.13176	0.39645	0.26250
子供はかわいい	0.05008	0.35259	0.32037
育児はどんな仕事より価値がある	0.06175	0.07686	0.56887
今回の出産は良い経験だった	-0.00164	0.14642	0.55867
育児に生きがいを感じる	0.05646	0.25067	0.54956
子供の成長が楽しみだ	0.18192	0.06543	0.48945
母親となって成長できた	0.09582	0.00123	0.45675
子供の存在は夫婦関係を良くしている	0.36828	0.04524	0.44852
また子供を産みたい	0.01883	0.37749	0.43391
毎日が充実している	0.27401	0.29948	0.40060
お産はつらくてもうしたくない	-0.07457	0.32295	0.40027
Eigenvalue	7.086135	2.883665	1.502098

表4 各項目毎の平均得点と否定的評定者の割合

	項 目	平均得点 (SD)	否定評定割合%
第Ⅰ因子	夫との関係はとても良い	4.22 (0.86)	4.6%
	夫に支えられていると感じる	3.92 (1.05)	10.2
	夫はこどもにとっていい父親だ	4.24 (0.93)	5.1
	夫とは何でも話し合える	4.15 (1.04)	10.2
	夫は育児に協力的だ	3.87 (1.09)	12.4
	☆夫に対していいたいことを我慢している	2.32 (1.32)	24.3
	☆夫は子供が出来てから冷たくなった	1.54 (0.97)	5.7
	☆夫がもう少し協力してくれたら育児は楽になる	3.17 (1.44)	50.8
第Ⅱ因子	☆この子がいるのでやりたいこと出来ない	2.41 (1.18) **	21.5
	☆育児よりも自分の好きなことがしたい	2.39 (1.02) **	11.8
	☆育児は負担で面倒だ	2.37 (1.18)	22.5
	☆日々の生活にゆとりがない	3.00 (1.18)	38.2
	☆育児をしていると世の中に取り残されそうだ	2.42 (1.26) *	21.3
	☆何故自分だけがこんなに苦労するのだろう	1.89 (1.07) *	9.0
	☆主婦は我慢させられることが多い	3.45 (1.21) *	55.9
	子供といると心が和む	4.43 (0.79)	1.7
	☆子供に甘えられると苛々する	1.62 (1.00)	6.7
	☆育児に自信が無い	2.44 (1.06)	15.2
	育児は楽しい	3.99 (0.87)	5.0
	☆女に生まれて損をした	1.75 (1.06) *	6.2
	子供はかわいい	4.91 (0.27)	0
第Ⅲ因子	育児はどんな仕事より価値がある	3.72 (1.03)	5.6
	今回の出産は素晴らしい経験だった	4.25 (0.96)	5.1
	育児に生きがいを感じる	3.52 (0.99)	10.7
	子供の成長が楽しみだ	4.79 (0.52)	2.8
	母親となって成長できた	3.79 (0.97)	8.4
	子供の存在は夫婦関係を良くしている	4.10 (1.06)	6.7
	また子供を産みたい	3.62 (1.41)	21.4
	毎日が充実している	3.73 (1.04)	12.8
	☆お産はつらくてもうしたくない	2.42 (1.36)	10.2

- 項目との一致度が高いほど5点に近づく
- ☆では、高得点であるほど否定的である
- * $p < .05$, ** $p < .01$ で第Ⅲ因子に対して否定的であったもの

児は負担で面倒だ」と感じている者の割合も少くない。

§3 ケア役割への意識

1) 伝統的役割への支持

家事・育児の担い手はほとんどが母親であり、共働き世帯の一部のみが家事は夫婦協働であった。「家事は女性の仕事」と考えている者は45.7%であり、その理由として「男は外で働くから女が家事をするのは当然」が46.8%、「家事は女のほうが向いているから」が25.3%であった。

家事に比較して育児は「男女両性の仕事」と

捉える割合が63.1%と多かった。「育児は女性の仕事である」は35.2%であり、その理由として、「母性本能や母性愛が必要だから」(36.1%)、「女性にとって重要な仕事だから」(26.2%)があげられ、女性自身に母性神話は支持されていることが推察された。

2) 育児の社会的価値

「育児は労働か、無償の奉仕か」という質問に対し、「労働」は26.9%、「無償の奉仕」は71.3%であった。家事に対する同様の質問では「労働」は69.2%、「無償の奉仕」は28.8%と逆転する。家事に比較して、育児は無償と捉える傾向が顕著であった。

「育児は日常生活の何％を占めるか」に対して30～100％の回答が得られ、その平均は78.8％(SD 16.0)であった。その育児負担に見合う1ヶ月の報酬金額を記述してもらったところ、「自分の子供を育てるのに報酬という考え方はおかしいので、金額の算定は出来るものでない」とする意見が35.9％と多かった。記述された金額の最低は1万円から最高は50万円までで、平均11.1万円であった。中には育児を「無償の奉仕」としながら、平均よりもはるかに高い報酬金額を記載している者もあった。

有償と捉えられた家事報酬の算定金額の平均は11.7万円であり、家事と育児の算定金額に差はなかった。家事・育児報酬を合算すると月額20万円を超える。

3) 伝統的役割の受容と対育児感情

「家事や育児役割は女性の仕事」とする伝統的役割に対する意見の相違は、対夫・対育児感情および家事や育児報酬に対する考え方に影響を及ぼしているであろうか。質問に対する回答から、対象を①両方(家事・育児)とも女性の仕事、②家事は女性の仕事だが育児はそうではない③育児は女性の仕事だが家事はそうではない④両方とも女性の仕事ではない、の4群で比較検討(分散分析による)した。第1因子「夫のサポート」については4群間に有意差はなかつ

た。これに対し、図1に示すように、第2因子「育児負担による自己実現欲求阻害」については、「両方とも女性の仕事」とする①群が最も対育児感情はポジティブであった($p<.01$)。また、第3因子「母親役割受容」についても同様の結果であった($p<.05$)。

報酬金額については、①③の「育児は女性の仕事」肯定群では育児を無償とする考えから算定金額は低く、②④の否定群では有償とする考えから算定金額も高くなる傾向にあったが、有意差はみられなかった。また、「育児が女性の重要な仕事として社会的に認められ育児報酬が与えられるとしたら、あなたはもっと子供を産み育てたいか」の質問には49.4％が「はい」と回答していた。

4) 伝統的役割受容に関与する要因

a. 夫との関係

第1因子「夫のサポート」に関する各評定項目毎に、その平均値から2群に分けた。夫のサポート得点が平均値より高い群では、第2因子「母親役割受容」に関する感情評定のすべての項目において、平均値より得点の低い群に比較して肯定的であり、有意差を認めた($p<.05$ 以上)。

夫との年齢差や職業による評定差はなかったが、夫の年収が300万円以下の世帯でやや否定

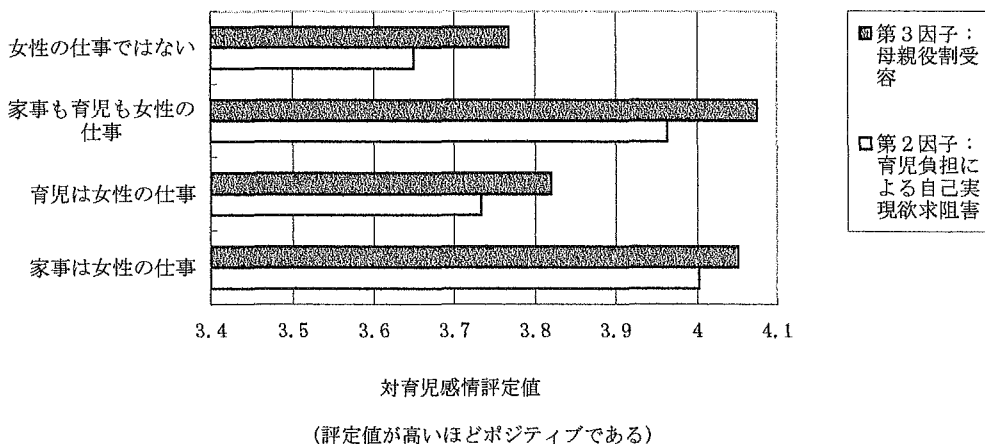
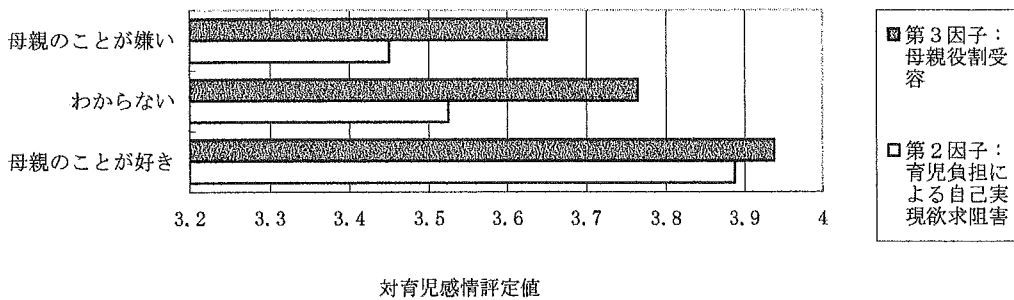


図1 家事・育児に対する考え方と対育児感情



(評定値が高いほどポジティブである)

図2 母親に対する好意と対育児感情

的であった ($p < .05$)。

b. 生育家庭における母親

生育家庭における性別役割観の有無は、伝統的役割の肯定とは関係がなく、また、「母親役割受容」に関する評定値にも差は見られなかった。しかし、母親に対する好意とは関係があり、「母親が好き」と回答した者に伝統的役割肯定派が多かった。これらの者は、図2に見るように、「母親が嫌い」という者に比較して、第2因子において肯定的であり ($p < .01$)、「育児による自己実現欲求阻害」は低くなっている。また、両親の夫婦関係が不仲で、冷たい家庭の雰囲気の中で育った者では、全体的に否定的であった ($p < .05$)。

c. 妊娠・分娩経過や子供の気質との関係

妊娠や分娩経過の相違による対育児感情には差はみられなかったが、子供の気質としての「扱いにくい子」では、母親の「自己実現欲求阻害」は強められる傾向を示していた ($p < .05$)。

d. その他、対象者の職業の有無や学歴などによる差は本調査においては見られなかった。

§4 対象者の育児不安

「育児に自信がない」と感じた者は15.2%であった。「育児をしていて大変だったと思うこと」についてあげられた主な内容は、「夜泣き、ぐずり」が24.7%、「夜間授乳」が17.9%、「家事との両立」が7.8%であった。1ヶ月健診まで

の育児不安内容は、「母乳が足りているか」が15.3%、「病気になるか」15.3%、「泣きやぐずりが多い」が8.8%、そして「自分で育てられるか不安」が8.0%であった。

§5 夫の育児協力

「夫の他に育児協力者がいない」という者は全体の46.0%を占めた。夫以外の協力者は実母であることが多かった。夫の育児協力内容は子供の入浴とオムツ交換、母親不在時のおもりであり、「夫がもう少し育児協力してくれたら」と感じている者が多いことから、日常的な協力量は少ないようである。

「妊娠から育児を通して夫から支えられたこと」の自由記述で最も多かったのは、精神的サポート（夫からの励ましや労いの言葉）であり、具体的な家事協力や育児協力をあげた者は少数であった。さらに、夫の帰宅が遅く、育児協力が得られず、孤独感を訴える者もあった。

§6 役割への葛藤

すべての母親が「子供はかわいい」と感じていた。しかし、「主婦は我慢させられることが多い」「何故自分ばかりが苦労させられるのだろう」「女に生まれて損をした」といった否定的感情を持つ者では、肯定派に比較し、「育児による自己実現欲求阻害」と「母親役割受容」に関する項目に対してネガティブであった ($p < .05$)。

「この子がいるのでやりたいことが出来ない」「育児よりも自分の好きなことがしたい」と感じている者についても同様の結果であった($p < .01$)。

Ⅳ．考 察

(1) 育児の現状

調査の結果、多くの女性が家事と育児に専念するために退職し、専業主婦となっていた。しかし、これは女性達の積極的な選択でもあった。子育てをしながら仕事を続ける女性は少数派であり、その両立は大変だという思いを抱えていた。また、現在は育児に専念する女性でも、子供の成長後の再就職を希望する者も多かった。

総務庁「子供と家族に関する国際比較調査報告書」(1996)¹¹⁾によると、日本では「女性は子供が小さいときには育児に専念し、子供が大きくなったら就業するのがよい」とする考え方が最も多く、アメリカに比較し結婚女性に対する就業否定派も多い。また、「子育ては生まれつき女性のほうが男性よりも適している」と考える割合も多く、子育て機能の性別化が支持されている。日本には「男性は外で働き、女性は家庭を守る」といった伝統的性役割を支持する傾向があるようである。

本調査では、核家族が多く、その中で母親一人が育児を担っているケースがほとんどであった。しかし、頼るべき夫は仕事に忙しく、育児協力は少ないのが実情であった。

夫婦当りの子供数は1人～2人と少なかった。1990年、厚生省人口動態統計は、1989年の合計特殊出生率が戦後最低の1.57人となったことを発表し「1.57ショック」と言われた。この数値は1994年には1.46まで減少し¹²⁾、平成7年度には史上最低の1.43となったことが厚生省から発表された¹³⁾。布施¹⁴⁾は、出生率の減少は女性の就労率や進学率とは関係がなく、「子産み」志向があるにもかかわらず、控えさせる背景に日本の環境の貧しさがあると分析してい

る。また、日本の女性達は長時間労働する夫に家事や育児の支援を求められないために、仕事を辞めざるを得ない状況があることも指摘している。核家族において、女性が育児と仕事を両立させることは、本調査にも見るよう、条件的には厳しいものがあると思われる。

(2) 夫との関係・夫の父親役割

大日向¹⁵⁾は育児をする女性の心理的安定にとって、夫婦関係の安定が大きく寄与する、と述べている。本調査からも同様の結果を得た。夫との安定した関係およびそのサポートは母親役割の受容にとって重要であることが明らかとなった。このサポートとは具体的な家事・育児協力ではなく、夫の理解と夫婦間の精神的な絆の強さであり、それが母親にとってポジティブな母性感情を育むことにつながる。しかし、対象者の中には、少数ではあったが、子供の出生後に夫が冷たくなったと感じている者があり、その者では夫に対する不満や母親役割に対する葛藤は大きかった。

家事・育児に対する父親の関わり方において、「家事や育児を母親とわかちあい、仕事と家庭を両立させる」という考えが多い一方で、アメリカや韓国と比較して日本では「仕事に専念～どちらかといえば仕事を優先させる」と回答した仕事派父親の割合が最も多いことが報告されている¹⁶⁾。育児は夫婦共同で行うもの、という考えを持ちながらも、実際には育児は母親任せとなっているのが現状である。母親達は我が子は可愛いと思うが、育児に追われるゆとりない生活の中で、夫とも話し合えず、世の中に取り残されてゆくような不安や焦燥感、そして孤独を感じていることが推察される。

(3) 役割葛藤と伝統的母性観の影響

母親役割の受容にとって、夫のサポートが重要な要因であることは前述したが、これ以外に役割受容に関わる要因として、女性のおかれていた社会状況と生育家庭の影響が考えられた。妊娠後退職した女性の中には、自分の意志では

なく「上司や夫に辞めるように言われた」者もあり、女性は家庭に入るよう無言の圧力がかけられたことも事実であった。性別役割分業観は社会的に強く支持されていることを反映していると思われる。

日本型近代家族の特徴である「家父長制」を色濃く取り入れた明治民法は、「家」制度を維持しつつ、男女の権力関係と家族内役割を規定してきた¹⁷⁾。さらに、第二次世界大戦後の高度経済成長を支える男性労働力再生産の担い手として、女性は家庭に入ることが主張された¹⁸⁾。しかし現代において、その性別役割はどのように刷り込まれてきているのであろうか。

柏木¹⁹⁾²⁰⁾は、母親の性別役割観（男は男らしく、女は女らしくという）は息子よりも娘のほうに多くしていること、また、伝統的役割観は性別役割観の有無に限らず、女子よりも男子のほうに支持されていることを示した。さらに、母親の期待に対する子供の自己制御発達の関係は、男児よりも女児のほうに自己抑制が発達することや、母親の女児への期待として自己主張よりも従順を期待するほうに自己抑制が高く発達することを示している。つまり、女性は「女の子らしく」従順であるように、自己抑制を発達させてゆくようである。

本調査から、生育家庭の中で、母親に好意を持ち母親の生き方を肯定的に受容してきた女性は役割の受容に対してポジティブであった。逆に、母親との葛藤があった場合には、役割への否定的感情を持つとともに女性役割に対する母親自身の葛藤も継承していることが推察された。また、生育家庭において伝統的役割観を受けてきた女性は少なかったにもかかわらず、伝統的役割の支持は依然として高かった。

これらの結果から、明治時代の家制度崩壊後にも、伝統的役割規範は文化として女性達の生き方の中で内面化され、継承されてきたことが考えられる。そして、その文化には、母親から娘への役割期待（伝統的・非伝統的にかかわら

ず）よりもむしろ、娘からみた母親像そのものが直接的に関係していることが推察される。伝統的役割を担っている自分の母親像を肯定はできないが、現実生活の中で伝統的役割を担わざるをえない自分に葛藤を持つ女性では、多くの矛盾を抱えていることが推察された。

(4) ケア役割の社会的価値

かつては「女の幸せは結婚にある」と信じられてきたが²¹⁾、結婚しない女性が増えてきているのは事実であり、その理由に「必要性を感じない」や「自由や気楽さを失いたくない」「仕事に専念したい」などがあげられている²²⁾。また、結婚しても子供を作らないカップルも増えてきており、妊娠し、育児する生活に、女性は自己実現を阻まれる恐れを感じるのかもしれない。また、これらの現実には、女性を家事や育児に結び付けることに対する女性の抵抗の現れともいえよう。

厚生省の調査²³⁾において、母親が子供を安心して産み育てるために行政に望んでいることとして、7割が「養育費・教育費の家計負担を減らす」ことをあげている。夫に支払われる扶養手当はあるが、妻の行なう家事・育児という家庭内労働に対しては直接賃金が支払われない。さらに、年次休暇や育児休業などは専業主婦にはない。

本調査から、家事・育児労働の報酬は月額20万円程度に相当するという結果を得たが、女性自身が、これだけの労働価値を「金銭に置き換えられない」とする背景にあるものは何であろうか。家事や育児に対する考え方においては、家事を労働と捉えているのに対し、日常生活の8割を占める育児を奉仕と捉え、金銭に換算できない別の価値が置かれていることが明らかとなった。

ここで、子育ての意味を問う調査結果²⁴⁾をみると、日本の母親の場合、「子育てを楽しむ」というよりも、「子育てで自分が成長する」ことを期待している。この、子育てによる自己成長を

期待する女性の考えは、仕事を辞め、育児に専業するという結果を招くほど、育児そのものに生きがいを見出そうとする姿の反映と思われる。

しかしながら、働く女性の増加とともに育児の社会化は進み、0歳からの託児施設も増えてきている。札幌市の託児料金は子供1人につき1時間600円～900円程度であり、1日8時間の託児料金は1ヶ月平均4万円程度であった。したがって、24時間行う1ヶ月間の育児は、母親が算定した約11万円という金額にほぼ一致することになり、母親自身が評価する子育てのコストは社会的に妥当と考えられる。

デンマークでは、仕事と子育てを両立させている女性の割合は多く、保育施設も充実している。また、老親の介護は家族が行っても有償である²⁵⁾。これは、育児・介護が社会の仕事であるという考えが基本にある。一方、経済大国と言われる日本においては、子育ては母性愛という無償の奉仕として母親一人に任されている。

本調査において、「育児も社会的に重要な仕事として認められ、育児に報酬が与えられるようになったら、もっと子供を産んで育ててみたい」と思う女性が多かった。このことは、育児のための経済支援が求められていることを示している。1995年に政府の示したエンゼルプラン（緊急保育対策5ヶ年事業）の目指す子育て支援推進²⁶⁾において、まず、家庭内で母親が行う家事・育児への社会的評価と経済的価値を認めた上で子育てに伴うコストの軽減や安全で低料金の託児施設の充実を図ることが必要であろう。また、子育てをする女性の母親（または義母）や夫との関係、および他の社会的関係における葛藤や問題を解決するためのカウンセリングの窓口が多く開かれることが期待される。

V. 結 論

伝統的母性観は、「家」制度の崩壊後もなお、女性一人一人の中に影響を及ぼしていることが

明らかになった。家事・育児という家庭内労働、およびケアの役割は女性役割とする伝統的役割支持派は依然として多い。しかし、家事と育児では女性の意識は異なり、家事を労働と捉え、育児は自己成長のための無償の行為と捉えていた。しかし、2割の女性は伝統的役割を受け入れてはいても、育児は負担と考えており、それにより一人の女性としての自己実現が阻害されていると感じていることが明らかになった。また、このことは母親役割への葛藤を大きくさせていた。特に自分と母親像の間に不一致を起こしている女性や、伝統的役割否定派の女性ではその葛藤は大きかった。

女性達が安定した心理状態で子を産み育ててゆくためには、親となってゆく男女に対して、育児を母親ばかりに背負わせないような意識を育ててゆく教育が必要であるとともに、子育てする女性の視点に立った保育支援施策が必要であると考えられる。

文 献

- 1) 大日向雅美：母性の研究。p.3-6, 川島書店, 1988, 東京。
- 2) 岩動孝一郎：性分化のしくみと半陰陽。林健太郎著者代表, 東京大学講座18, 男と女。東京大学出版会, 1974, 東京。
- 3) 河合隼雄：家族関係を考える。講談社現代新書, 1980, 東京。
- 4) Money, J.: Psychological Differentiation. Holt, Rinehart & Winston. Sex research, New Developments., 1965, New York.
- 5) M. ミード：田中寿美子／加藤秀俊訳：男性と女性。東京創元社, 1961, 東京。
- 6) 斎藤 学：子供の愛し方がわからない親たち, 講談社, 1992, 東京。
- 7) 大日向雅美：母性の研究。p.135-170, 川島書店, 1988, 東京。
- 8) 牧野カツコ：乳幼児を持つ母親の生活と育児不安。家庭教育研究所紀要 NO 3, p.34-56, 1982。
- 9) 花沢成一：母性心理学。第2章母性意識の発

- 達, p.9-60, 医学書院, 1992, 東京.
- 10) 今井道子: 乳幼児を持つ母親の子育てに関する研究 (I). 武庫川女子大学紀要 (人文・社会学) 41, p.41-46, 1993.
 - 11) 総務庁青少年対策本部編: 子供と家族に関する比較調査報告書, p.38-40, p.66-67, 大蔵省印刷局, 1996, 東京.
 - 12) 厚生省児童家庭局母子保健課監修: 母子保健の主なる統計, p.18-22, 1996, 東京.
 - 13) 朝日新聞: 平成7年7月7日朝刊.
 - 14) 布施晶子: 結婚と家族. 岩波市民大学 人間の歴史を考える 5, p.143-163, 岩波書店, 1996, 東京.
 - 15) 大日向雅美: 子供の誕生は結婚生活にとって福音かストレスか. 家族心理学年報 9, 25-38, 日本家族心理学会, 1991.
 - 16) 前掲書 11), p.64-65.
 - 17) 上野千鶴子: 近代家族の成立と終焉. p.69-104, 岩波書店, 1994, 東京.
 - 18) 前掲書 1), p.19-23.
 - 19) 柏木恵子他: 子供の性役割学習過程. 東京女子大学論集 23, p.72-98, 1973.
 - 20) 柏木恵子: 自己認識と自己制御機能の発達. 柏木恵子責任編集, 新・児童心理学講座 10, パーソナリティの発達. 第2章, 金子書房, 1992, 東京.
 - 21) 総理府: 女性に関する世論調査. 1987.; フォーラム女性の生活と展望編: 図表で見る女の現在. p.6-7, ミネルヴァ書房, 1994, 京都.
 - 22) 厚生省人口問題研究所: 第10回出生動向 基本調査第2報告書. 独身青年層の結婚観と子供観, 1994.; 江原由美子・井上輝子編: 女性のデータブック第2版. p.14-15, 有斐閣, 1995, 東京.
 - 23) 前掲書 12), p.130.
 - 24) 前掲書 11), p.52-54.
 - 25) 財団法人全国勤労者福祉振興協会: デンマークと日本の働く女性. 福祉協資料 No.19, p.1-28, 1994, 東京.
 - 26) 日本総合愛育研究所子ども家庭サービス 教育・研究ネットワーク編: エンゼルプラン: 今後の子育て支援のための基本的方向について. 文部省・厚生省・労働省・建設省: 別冊発達 21 子ども家庭施策の動向. p.133-138, ミネルヴァ書房, 1996, 京都.